

明石の史跡（98）西江井村の馬田



『明石記』（享保年間）の「西江井村」（中世では魚住荘＝現在は、大久保町江井島）の綱目に、次のような記事がある（便宜、句点をいれた）。

馬田 此所昔馬ヲ葬埋タリ、其氣残りケルニヤ、此所ニテ倒タル者、三年而死ト云伝、適転タル者、其下ニ敷タル方ノ片袖ヲ引切テ、此所ニ置帰レハ、災ヲ除ト云、此一沼田ニシテ、茅薄生、蛭多住ト云

その大意は、享保の頃、西江井村に所在する馬田（現在地は、目下の所不詳）というのは、昔、馬を埋葬した場所であったために、たまたまそこで倒れたものは、3年して死去するとの言い伝えがある。たまたま、転んだ者は、地面に接した方の片袖を引きちぎって、その場に放置して帰るならば、「死」という災難からのがれることができる。ところがこの場所（馬田）は、沼田となって、茅や薄が群生しており、蛭が多く住みついているという。住人にとっては、あまり接近したくない場所であったのだろう。

西江井村といえば、江井島港（中世では魚住泊）があり、秀吉の播磨入国以前から、諸商品の陸揚げとともに、市が立ち、人馬にて三木へ送っていたことが知られる。ことに、別所長治の三木籠城後は、毛利輝元よりの兵糧搬送の取次ぎに、繁多をきわめたことが知られる（卜部昌行氏所蔵文書）。

三木開城の直前、天正8年（1580）の1月8日夜、秀吉は、魚住城（大久保町西島）を攻撃し、打撃を与える（「反町文書」『兵庫県史史料編中世9』363頁）。当地は、人馬ともに大きな被害を被ったであろう。

それから1世紀以上も経過した当時（享保頃）、過去の不幸な出来事を、「馬田」として、記録にとどめたのではなかろうか。

日本歴史学会会員 茨木 一成



魚住城